

資源不足プライミングが集団成員性の知覚に及ぼす影響

—2つの実験の追試—

The impact of resource scarcity priming on the perceived group membership of targets
—Replication of two experiments—

竹部 成崇¹, 本田 周二²
Masataka Takebe¹, Shuji Honda²

¹文学部, ²人間関係学部

キーワード：資源不足, 社会的プライミング, 内集団境界の形成, 追試, 台湾
Key words : Resource scarcity, Social priming, In-group boundary formation, Replication, Taiwan

1. 研究目的

社会ではしばしば自集団の中に存在する異質な人々を排除しようとする風潮が強まる。こうした傾向は様々な摩擦を引き起こす可能性があり、実際に暴動が増加したという報告もある。

社会科学における複数の領域の研究が、こうした現象の背後に資源不足の影響がある可能性を示唆している。特に心理学では、こうした資源不足による内集団の狭隘化が、態度や行動より前の「知覚」という段階で「非意識的」に生じることが示唆されている。具体的には、資源不足をプライミングされた参加者は、内集団成員か外集団成員か曖昧な人物を外集団成員と知覚しやすくなることが示されている。資源不足による内集団の狭隘化がどの段階でどのように生じるかは、内集団の狭隘化に伴う摩擦や葛藤を予防・低減する方法にも関わるため、この知見は理論的にだけでなく、社会的にもインパクトがあるものである。

しかし近年、上述の心理学研究の知見に疑問を抱かせる研究結果が報告されている。具体的には、上述の知見を最初に示した研究 (Rodeheffer et al., 2012) を追試したところ、結果が再現されなかった (Takebe et al., 2023)。1つの再現に失敗した追試研究により元研究の知見が完全に否定されるわけではないが、Takebe et al. (2023) は元研究の約10倍のサンプルサイズで事前登録をした上で追試を行ったこと、また、元研究が実施された時代はQRP (Questionable Research Practice) が横行していたことを踏まえると、元研究の知見への疑念は深まる。

果たして、資源不足による内集団の狭隘化は本当に態度や行動より前の「知覚」という段階で「非意識的」に生じるのだろうか。

以上を踏まえ、本研究では、資源不足による内集団の狭隘化が本当に態度や行動より前の「知覚」という段階で「非意識的」に生じるのかを再検討した。具体的には、Rodeheffer et al. (2012) の研究1を台湾で追試した。台湾で追試研究を実施した理由は、①Rodeheffer et al. (2012) の研究は人種的に曖昧なターゲットの人種を判断させる課題であったが、日本は極端に人種の多様性が低いため、プライミング効果が弱まった可能性があるため、②日本は長らく経済不況であるため、資源不足プライミングの効果が弱まった可能性があるためであった。すなわち、①台湾は歴史的に日本より人種の多様性があるため、②台湾は日本のように長らく経済不況が続いているわけではないため、プライミング効果が強く現れる可能性があるためであった。

なお、当初はRodeheffer et al. (2012) ではなく、他の2つの研究の追試する予定であった。しかし、台湾で研究を実施する機会に恵まれたため、予定を変更し、Rodeheffer et al. (2012) の研究1を台湾で追試することとした。

2. 研究実施内容

実験計画は1要因2水準の参加者間計画 (資源状況：資源不足/資源充足) であった。参加者は楽天インサイトを通じてリクルートした漢族の台湾

人であり、最終的なサンプルサイズは 842 となった。これは元研究の 10 倍以上のサンプルサイズであった。なお、実験実施に先立ち、大妻女子大学の生命科学研究倫理委員会の承認を得た。また、Open Science Framework にて事前登録を行った。

実験は Qualtrics 上で行った。初めに記憶課題と称して資源不足あるいは資源充足を表す約 1 分間のスライドショーを見てもらい、資源不足あるいは資源充足をプライミングした。なお、本実験実施前に、予備調査でプライミング刺激としての適切さが確認されていた。続いて、分類作業と称して、台湾人とベトナム人の顔を合成して作成した 20 の顔刺激について、漢人だと思うか東南アジア人だと思うか判断してもらった。なお、本実験実施前に、予備調査で東南アジア人と判断される確率を調べ、50%にできるだけ近い刺激のみを用いた。最後に、ゼロサム信念、ポジティブ感情とネガティブ感情、デモグラフィック変数や幼少期と現在の社会経済的地位などについて尋ねた。

仮説は、①資源不足を描写するスライドショーを見た漢人参加者は、資源充足を描写するスライドショーを見た漢人参加者より、合成顔を東南アジア人 (i.e., 外集団成員) と判断しやすいだろう、

②この傾向は社会経済的地位が低い参加者において顕著だろう、③この傾向はゼロサム信念によって説明されるだろう、というものであった。①が元研究の知見の追試部分で、②③が元研究の知見の拡張を試みる部分であった。しかし、分析の結果、どの仮説も支持されなかった。

3. まとめと今後の課題

本研究では、台湾において Rodeheffer et al. (2012) の研究 1 の追試を行った。その結果、元研究の知見は再現されなかった。今後は、本研究のデータから、知見が再現されなかった以上の何か新しい知見 (あるいはその可能性) を提供できるか、探索的分析を行っていく。また、その結果を踏まえて、資源不足プライミングと集団成員性知覚に関する研究の今後の展開を模索していく。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 (K2411) 「資源不足プライミングが集団成員性の知覚に及ぼす影響—2つの実験の追試—」を受けたものです。